

# ゆうびんやさん

## おとしもの



國吉 栄

昨年は、子どもたちとずい分たくさん縄とびをした。朝、誰かしらが、「ゆうびんやさんやって」と言いにくる。「いいわよ、先に縄を用意しておいてね」「はい！」。子どもは走って棚の上のカゴから縄を二本とり出してつなげ、一方の端をどこか動かないものに結んで「せんせー、できたよー」と呼ぶ。もう一方の端を私が握ると、子どもは待ちかねたように縄の結び目付近に立つ。「ゆうびん

やさん、おとしもの、ひろってあげましょ、一まい、二まい、三まい……」。『いれて』『いれて』とたちまち数人の子供が並ぶ。こうして何日、何回、縄を回したことだらう。『このところずっと“ゆうびんやさん”の縄回しを一時間近くやっているが、こんな単純なことが結構おもしろい』と、十二月初めの保育記録に書いてある。毎日縄を回し続けるのは確かにくたびれることではあったけ

れど、今振り返っても、あれは本当におもしろかった。縄を回すという単純な繰り返しの中で、たくさんの子どもたちと親しく出会うことができたからである。

縄とびをしている時、子どもたちは、どうしてこんなに一心に、誇らし気に跳ぶのだろうか。地面からほんの何センチか跳び上がっただけに、驚くほど普段と違っている。「ゆうびんやさん、おとしもの」と、波が左右に動いている間は比較的気軽に跳んでいるが、「一まい、二まい」と縄をぐるっと回す直前になると、急に顔が引きしまり、「さあくるぞ」という感じで身構える。そして一心不乱に跳び始める。トントントン。規則正しいリズムに乗って、別の世界に入ってしまったようだ。グルグル回る縄を跳ぶ時、ほとんどの子どもたちは、回し手である私の目をヒ

タと見つめている。私の目の中に次に来る波を見ているのだろうか。彼ら自身を託しているような透明な目だ。グルリとめぐる縄の内側は、彼らの小宇宙なのかもしれない。「ごおまい、ろくまい……」と傍らで数える子どもたちの声が、「呪文」のように、めぐる宇宙の外側に薄い膜をつくっている。回し手である私も別世界に移されてしまったようだ。冬休みに子どもからクリスマスカードが送られてきた。「クリスマスおめでとう。ゆうびんやさんののしかったです」。そう、本当に楽しかったわね。

外側で見ている子どもたちにとって、縄のめぐりを自由に跳び越える友だちの姿は、信じられないほどのあこがれを誘うものらしい。たくさんの子どもたちが、それぞれの関わり方で、縄とびのそばにやって来た。そば

に来て私の手を握って見ているだけの子ども。その子と手をつないで縄を回しつ、波の動きに合わせて一緒にポンポン跳びあがると、キャッキャッと声をあげて笑う。「電車が通ります」と言って、わざわざ縄の下をぐりに来る子どもがいる。何日もやりたそうにそばで見っていた末、「Kちゃんがやりたいって」、と他の子を連れて来た子どももいる。「そう、Mちゃんもやる?」と聞くと、「うん」と言ってお安心したように並ぶ。縄とびが全く初めてでも列に並ぶ子ども。跳べるようになってからでない、皆の前でやろうとしない子ども。みんなそれぞれに、あこがれの世界に関わりを持ちたくてやって来るのだ。

年賀状が来た。その一通に、「またいっしょになわとびをしてください」とあった。私は胸をつかれた。この子とはまだ一度も一緒に

に縄とびをしたことがなかったからである。そばで見っていたという記憶もない。その子が「またいっしょになわとびをしてください」と書いてきた。彼女は二期の半ば過ぎから遊びが変化し、一人で何かを作っていることが多く、私も気になっていた。一人で箱をつなげながら縄とびを見ていたのだろうか。心の中で、自分も一緒に跳んでいたのだろうか。彼女のその頃の様子を思って、心穏やかではなかった。

冬休みが明け保育が始まったが、何日待っても彼女は縄とびをしに来なかったし、そばにも来なかった。けれどもある日、とうとう、「なわとびしたい」とやって来た。「いいわよ、後ろに並んでね」。ドキドキする気持ちを抑えて迎える。彼女の番になった。回さないで左右にゆっくりと波をつくるのだが、なかなかうまく跳べない。必死で下を向いて

縄の動きを見ている。「下を見ないで、先生の目を見て跳んでごらん」。すると彼女は真面からくいいるように私の目を見て跳び始めた。ひざもゆるめず、腕もまっすぐに伸ばして、直立の姿勢でトントントン跳んだ。少し早いかな、と思ったが途中で縄をグルッと回してみた。一瞬びっくりしたようだが、彼女はそれこそ機関銃のようにトントントントンと早い速度で跳び始めた。回す方もそれに合わせてグイグイ早くなる。高速で車を走らせているような緊張感。ほんの少しでもリズムが狂ったらおしまいである。ところが、一途に真剣な目が、気がつくとき少し笑っている。よかった。彼女は何度も並び直して、その日のうちに跳べるようになってしまった。

それから数日は、登園すると必ず朝一番に、「せんせい、なわとびやりたい」と言いに来た。そしていつの間にか縄とびの列から

離れ、入園の頃のように庭に出て、他の子どもに交じって砂遊びやボール遊びをする姿が見られるようになった。あの子の問題が何であつたのかよくわからないけれど、縄とびの宇宙をくぐりぬけて、それを跳び越えていったことはわかつた。

このような劇的な縄とびはもちろんだが、もっと気楽にのんびりと、全く跳べない子が跳べるようになるのに付き合うのは、別の楽しさがある。四歳児のTはもう何度も挑戦しているが、まだうまくいかない。波に身体を平行に向けて跳ぶことができず、跳んだ後、二歩、三歩、ツツツと前進してしまふ。一回一回、障害物を跳び越えるように跳ぶ。赤ちゃんの歩き始めのようにTは決してあきらめない。挫折しない。

赤ちゃんは床に水平になって、大きな子どもたちが垂直に自由に動き回っているのをど

んなにあこがれて長い時間見つめていたこと  
だろう。だから、時が来ると敢然と立ち上  
がる。ころんでも飽かず立とうとし、そして歩  
き出す。縄を前に奮闘しているTも、いよいよ  
あこがれの『跳ぶ世界』に挑戦してきた。

大人である私は、彼女が早晩、苦もなく跳べ  
るようになることを知っているから、彼女が  
新しい世界に踏み出そうとする場に参加でき  
ることがただうれい。目の前で『歴史』が  
作られているような気がする。

おそらく子どもたちも、そう感じているの  
ではないだろうか。Tの動きに合わせて「い  
ーち、にーい」とゆっくりかぞえながら、子  
どもたちはTの中に少し前の自分たちの姿を  
見、励ます私の声に、かつて自分も同じよう  
に声をかけられたことを思い出して、彼女の  
努力に共感しているように思える。Tがへと  
へとになって終わると、「とべたね」と迎え

ている。縄とびは舞台のようだと思う。舞台  
上の跳び手と、舞台作りの回し手と、観客で  
ある数え手と、お互いに共感している舞台で  
ある。

何かが出来るようになることは本当に素晴  
らしいことだと思う。子どもたちに喜びを与  
え、束縛から解き放つ。けれども「出来るこ  
と」自体が目標になる時、楽しさは失われ、  
縄とびは、「出来る者」と「出来ない者」を  
峻別する道具になる。「わたし、できるよ  
うになったから、もうやらない」と言った女児  
の言葉が印象に残る。

また、「出来ること」そのもので、自分の  
存在を認めてほしいと思うと、遊びは悲愴な  
ものとなる。保育参観の時、「ママー、見て  
見て！」と叫びながら跳び続けた女児のこと  
を思い出す。彼女は母親が帰った後、おそら

く力尽きたのであろう、おもらしをしてしまった。「何かが出来ること」「誰よりもよく出来ること」「あなたのためにこんなにかんばること」、そのことにしがみつかねば生きられない時、子どもは限界を超えてしまう。友だちと大人とが支えてくれる自分の宇宙に、自分の意思で、自分のテンポで、リズムをきざんでいくことの大切さを、縄とびの遊びが教えてくれたように思う。

請われるままに縄を回していると、心迷う時がある。順を待つ列が長くなると、大切な遊びの時間にこんなことをしているのだからかと思う。あの子は他にすることが見つからなくて、何となくここに並んでいるように思える方がいいのだろうか。自分が「縄回し機」になつたような気持ちになる時もある。しかし私はやはり急いではならないと思う。この、のんびりとした世界の中に動いているも

のがある。思いがけずいいねいにつき合うことになつた遊びの中にも、やはり保育の世界は開かれている。保育は相互に関与し合う「応答の世界」だと思うから、性急に答えを出せるはずもないのだ。

一人の子どもが縄とびの最中、ポケットからティッシュペーパーを落とした。「Oちゃん、ティッシュ落としたわよ」と呼びとめると、他の子どもが言った。「せんせい、ゆうびんやさん、おとしもの、っていえばいいんだよ」「そうね、はい、ゆうびんやさん、おとしもの」。そばにいた子どもたちも一緒に笑った。

(立教女学院短期大学  
附属愛児研究所天使園)